

平成二十七年九月一日発行 第二十五巻第九号 通巻第二九二号 (毎月一回一日発行)
平成三年九月十八日第三種郵便物認可

槐

かい

岡井省二創刊

平成27年9月号



日常

高橋将夫

何にでも名人はをり茄子漬

我が前で金魚安心してをりぬ

花魁草身の上話してをりぬ

かぐや姫も寝苦しからむ夏の月



連日の暑さにめげず口達者
女には女の夏があるらしき
業平忌男はなべてマザコンで
七色の雨になりさう梅雨の虹
男滝から女滝への道九十九折
ハンカチを振って宇宙へ旅立つ日
日常のはるかかなたに鵜飼の火



槐安集

水野恒彦

虹の輪のすこし濡れすこし揺れ
水蒼くゆつくり流る桜桃忌
天使魚まどろみの夢盗みに来
花嬰粟より現れし少女の吾を慕ふ
ががんぼの足すぐに抜け逢魔ヶ時

加藤みき

梅雨晴間直射日光痛かりき
面目など端はなからなかり閑古鳥
人形ひとがたにうつすらルージュ付きみたり
水満満匂袋のかすかな香
大言も苦言も夏の河馬の口

中島陽華

あすなるに赤き花咲き柏餅
鯉のぼりボレロのリズム近づき来
僧形となる少年や梅雨鯨
大観はなけれど宇治の新茶かな
空海や薔薇の散華は貝の道

竹内悦子

河骨や女ばかりの肉料理
大判草翠の円を蔵しをり
ほたる袋頭陀袋なり犀の角
熊野みち蚯蚓の屍灼けてをり
蜻蛉の交みて飛べり高瀬舟



雨村敏子

むらさきの螢袋とわたつうみ
天井まで二万冊の本緑さす
白南風や司馬遼太郎記念館
人の世のおかしとふしぎ鱧の皮
梶の葉のゆらぎ男の扇かな

本多俊子

雉鳩のかしこき眼夏来る
若葉風犀の胸毛に白きもの
滴りの水輪を映す小宇宙
山法師の花のこぼせる言葉かな
擬宝珠咲き葉陰にゆれる白日夢

近藤喜子

青葡萄まだ山霊のものなりし
火蛾さそふ夜の青白く笑みてをり
父の日や柳行李の中に父
こもり鳴く青鳩に梅雨深きかな
寝惜しむや涼しき星を身ほとりに

瀬川公馨

ほとぼりと氷点のあり青き蝶
坊さんが梅雨の由来を縷縷かたり
大麦の間にアーティチョークかな
悠悠と去つてゆきけり梅雨鼯
梅雨茸を払い腰にてイツポン

久保東海司

うす紙をはがすが如く桃をむく
山昏れて夕風に着る藍浴衣
戦没の勇士の墓に蟻の這ふ
祓はれて神の微笑む山開き
山の鳶ただよふ空やこま鳴けり

柳川 晋

緑蔭の破顔の人になりゐたり
炎帝の思ひの乱れ天・気凶に
半夏半夏六根清浄酢蛸なり
ごきぶりの野望^{ゆめ}は宇宙温暖化
知らぬまに一人増え百物語

熊川暁子

苗障子みどりの風のうひうひし
はいはいと重ねてさびし梅雨の月
ルノアールの濃き緑陰に迷ひ込む
蟻の頭の西日まみれの暗さかな
ソーダ水ちひさき嘘の溢れだす

寺田すず子

梅花藻の揺れて大日^{おほひ}在しけり
椎の花笑ひ出したり烟立つ
闇は吾がこころに在りと半夏生
仙人掌の花や一日^{ひと}の恋なりし
苔の花重たき空となりてきし

岩下芳子

山いくつ潜り潜りて滴れる
水遣りのホースの描く虹の橋
青空の引つ張つてゐる今年竹
川幅を埋めつくしたる祭船
うとうとと総身あづけて籐寝椅子

近藤紀子

シャツの背に薫風丸く入れて過ぐ
花つけし瓜のなり子の尻天に
桜井の青葉の雫青きかな
茅花ほほけ産土の畦白じらと
植田わたる風の匂ひや山暮るる

岩月優美子

万緑のなか六太の鼓動かな
神官の衣の眩しき青葉闇
燕子花旧家に風の筋ありぬ
旅に出てこころの黴を晒しをり
大空の底鷺草のはばたけり

竹中一花

万緑の山に抱かれ寺光る
街の色変へる緑雨を走りけり
揚羽追ふ水辺の光背ナにして
土蹴つてふらここの船出航す
葉隠れにをる夏鹿の気配かな

槐市集

柴田靖子

のうぜんや思ひ潜ませ語りつぐ
自己主張過大とも見ゆ夏の雲
のぼりきて闇に一つの燈涼し
可惜夜の夢ふくらまし夏の月
水の闇風すべりくる夏の夜

杉原ツタ子

傾ぎける茅花あかとき月夜かな
風薫る奉納燈籠数多かな
吉縁や白から黄へとすひかづら
神木の七種寄り木や新樹光
薫風や春日造と朱の柱

高野昌代

早乙女にままならぬ泥御田まつり祭
赤子もて乳せり泣かす早苗月
ご当地の岐阜蝶捜さで夜の蝶
樹木医の熱き話に大西日
紫陽花を色々咲かせ芦屋夫人

田中信行

リラ冷えの街にぼつりと夕灯
雨だれも香りを放つライラック
北大の蕾の薔薇を賞でにけり
梅雨空にユトリロの絵の重さかな
雨上がり郭公の音の寝覚めかな



谷岡尚美

洗い桶に銀のスプーンや夏初
梅雨明けや信貴をとよます僧の声
鮎のこと知りつくすひと寡黙なる
滝道や落差おしえる孫とみて
漬りよし茄子の紺色なお深む

時澤 藍

時の日の体内時計狂ひをり
一陣の風に茅花の発光す
ペディキュアの真紅あせたり揚羽蝶
和菓子屋の白き暖簾や夏来る
薔薇苑のあるじ老舗のこんやく屋

中 貞 子

宿場町とまとを漬す山の水
茱萸の色堀抜の水こんこんと
万緑に放してやりし子犬かな
母の忌や半夏生の根の太き
真紅の花活け炎暑の厨かな

中島昌子

走り根を大股で行く登山帽
梅雨空を支へてゐたる仁王門
姿見を磨いてをりぬ更衣
逃亡の跡紛れなき蛞蝓
田に水の引かるる早さ雲白し

中田禎子

ロープウェイ万緑を抜け空をゆく
開けてゆく高野山頂夏の蝶
閑かさに五尺の吾も夏木立
羅に時の流れのありにける
夏足袋の白の続きて奥の院

中 谷 富 子

初めてのポトナスで買ふ切子かな
あぢさゐの盛りの花を切りにけり
糠床の匂ひ手にある午睡かな
梅雨空に万年筆のインクの香
八重咲きの十葉にある翡翠色

槐集

高橋将夫選

梶の葉に大往生と書きにけり
枚方 阪倉 孝子

畳紙に父の名のある夏袴

甚平のほのぼの似合ふ背中なり

浮いて来い意地張ることの有りにけり

なほ奥へ奥へと誘ふ青野かな

隠し事少しはありて五月晴
大阪 有松 洋子

十葉の真水のやうに咲いてゐる

雷光や何か大事なものよぎる

山彦は留守や全山夏の霧

青梅雨や夜ごとグラスを磨き上げ

旅するは我が感性の更衣
江島 照美

折り返し地点は今か夏至の夜

日本の女は担ぐ荒御輿

保護色は蛍光色よ青蛙

引き算の美学もありし更衣

草笛を吹きて山河の迫り来る
岡崎 犬塚李里子

樹の匂ひ風の匂ひや半夏雨

額の花ひらけば妣の声のあり

梅雨に入る何か聞こえるパンの耳

風も雲も夢のやうなり棕櫚の花

読み漁る輪廻転生落し文
喜屋川 前田美恵子

魂の触れ合ふ二匹夏の蝶

緑陰や句碑にありたる裏表

踏み入るをためらふ沙羅の花の下

民宿の生臭きかな渋団扇

砂浜を素足で少女夏立ちぬ
岡崎 柴田 靖子

いちばんの輝きに愛を蛍かな

ふいに寂しさはこびきて黒揚羽

眺めぬる金魚に我もながめられ

心も色も透明が好き星涼し

銀河往来 高橋将夫

◇『槐集』鑑賞

梶の葉に大往生と書きにけり 阪倉 孝子

古来、七夕には梶の葉に詩歌を書いて星に供える風習がある。その梶の葉に「大往生」と書いたという。誰にとつても死は人生最後の大事業。願わくは、大往生といわれる最期でありたい。〈甚平のほのぼの似合ふ背中なり〉の句の「ほのぼの」や、〈浮いて来い意地張ることの有りけり〉の句にある浮人形の意地や、〈なほ奥へ奥へと誘ふ青野かな〉の句の青野の魅惑に、今の作者の精神の位相を垣間見る思いがする。

十葉の真水のやうに咲いてゐる 有松 洋子

十葉の咲く景を「真水のやうに」と描写した。奇を銜うでもなく、それでいて尋常でないこの表現に惹かれる。〈隠し事少しはありて五月晴〉の句の無邪気さや、〈雷光や何か大事なものよぎる〉の句の鋭い感性は作者ならではのもの。

日本の女は担ぐ荒御輿 江島 照美

荒御輿というほどではないが、天神祭のギヤル神輿を思い浮かべた。それにしても、パレーの東洋の魔女、サッカのなでしこジャパンなど、日本女性のパワーには素晴らしいものがある。掲句はそんな日本女性の一面を暗示する一句といえよう。〈引き算の美学もありし更衣〉の句、厚着から薄着に変わるさまを引き算の美学とみた。単に涼しければよいというものではなく、あくまでも美が肝心だという。いかにも女性らしい。

草笛を吹きて山河の迫りくる 犬塚李里子
草笛を吹く作者を取り巻く大自然が見えて来る。〈風も雲も夢のやうなり棕櫚の花〉の句もまたそんな大自然を心の目でしかと捉えている。

緑陰や句碑にありたる裏表 前田美恵子

句が刻まれた句碑の裏に何が刻まれているのか。何事にも陽があれば陰があり、表があれば裏があるという自然の摂理を暗示する一句。〈魂の触れ合ふ二匹夏の蝶〉の「魂の触れ合ふ」にも惹かれた。ただ、「二匹」については「蝶は一頭、二頭と数える」と物知り顔で指摘する人が必ず出て来ると思う。でも、頭とは言いづらい。私なら、〈魂の二つ触れ合ふ夏の蝶〉としたい。

眺めぬる金魚に我もながめられ 柴田 靖子

確かに自分は金魚から眺められている。一步離れて、自分を客観視して初めて周りが見えてきた一句。〈ふいに寂しさはこびきて黒揚羽〉の句の主観も、〈心も色も透明が好き星涼し〉の主観も、自分を客観視する中から生まれた感情といえよう。

若竹や縮む背丈も年の功 山根 征子

加齢で背丈が縮む句は他にもあるが、それを「年の功」と陽転した句は他にない。季語の若竹がよく効いている。

羅を物の怪通り過ぎにける 中田 禎子

物の怪が羅を通り過ぎて心に入り込んだような怖い一句。〈以下略〉